－写真訪問①－

浦河測候所の沿革

浦河測候所の創設経緯は「浦河築港事業の完成と共に沿岸沖合漁業に従事するものが激増し、海難防止のためにも、気象利用の必要性が考えられ、日高沿岸漁民、特に浦河町民の要望と浦河町の敷地寄付により設立せらる」とある。

大正１５年１２月３日（文部省告示第３８０号）日高国浦河町に設置浦河測候所と称す。

昭和２年１月１日（中央気象台告示第３号）気象業務が開始された。

浦河港は日高地方の唯一の商業港であり、拠点漁港でもある。明治２０年浦河築港工事がイギリス人によって進められた。大正１０年から浦河港の修築工事が始まり昭和４年に完成した。

北海道の背骨といわれる日高山脈は、かっては厚い地層を堆積させた地向斜の海が、一転して地殻変動の場となり激しい変成作用や深成作用をともないつつ、しだいに隆起して褶曲山脈が出来たもので、「日高造山運動」と言って、今から１２００万年前中生代白亜期のことである。この時代の代表的化石、アンモナイトの産地として浦河は有名である。

今の山容になる間に、地球全体が冷える氷河期が何回かあった。山頂の氷河が山肌を削って、お椀みたいな円い底の谷を造る。この山斜面に生じた半円形の凹みカールが、幌尻岳などに見られる。日高山脈の南の端えりも岬の沢から氷河時代のマンモス象の臼歯が発見され氷期は大陸とつながっていた証拠でもある。また、この時代の生きた化石と呼ばれる啼きウサギが棲んでいる。

氷河の盛衰による海水面の昇降で海進、海退を何度か繰返され、海岸段丘、河岸段丘ができた。最後の氷河時代の最盛期（２万年前）が終わり気候が温暖となる後氷期にはいって最も気温が上昇したのは、今から約６千年前で海面はおそらく今より４メートル位高かったものと推定されている。したがって海は陸地に浸入していった。縄文海進とよんでいる。現在の浦河市街地の大部分は太平洋の荒波にあらわれていたことでしょう。

浦河市街は日高山脈を背にし、単調な海岸線に迫った海岸段丘がけの狭い平地と、中小河川の河口付近に形成されている。浦河測候所は市街中央の小高い台地（海岸段丘）にあり眼下に海岸沿いに伸びた町並みと浦河港を一望できる。今から遡ること何千年もの昔、眼前に波頭を噛む太平洋を望み背後に連なる日高山脈を背負う、この台地から先住民、縄文時代の遺跡が発見された。

先住民は、日当たりがよく水はけがよくまた飲み水が得やすい所を選び、住居をかまえ狩や漁をして生活していたと想像される。出土したものは、石器（石槍,石斧,石包丁等）、土器（破片が多く完全なものはない）、獣骨などである。しかし、遺跡は相当に攪乱されている。浦河ではこの他、十数地点から縄文時代、続縄文時代、擦文時代の土器、石器、装身具、骨角器などが出土している。いずれも海岸沿いの海岸段丘や

河川下流域の河岸段河上に分布している。

浦河測候所は縄文時代の埋蔵文化財の上に建っていることになる。近年多くの気象台、測候所が合同庁舎に入る中で、当所は現在地に単独庁舎の新営計画で、今年度そのための調査費がつき平成6年度から工事着工し平成7年度完成の予定である。このため文化庁による発掘調査が昨年１０月実施された。調査は露場とその周辺で行い1地点（1㎡）平均５０個の埋蔵物が出土した。埋蔵文化財包蔵地の保護は現状保存を原則としており包蔵地内での工事については十分な注意が必要である。

浦河測候所の最初の庁舎は、木造平屋建（５３坪）であった（写真１）が、老朽化により昭和２９年現庁舎（鉄筋コンクリート造り、2階建一部3階建）に変わった。（写真２）写真で見るかぎり、なかなかモダンでどこも傷んでいないように見えるが、地震、風雨等による亀裂、歪み、雨漏り等があり立て替えられる

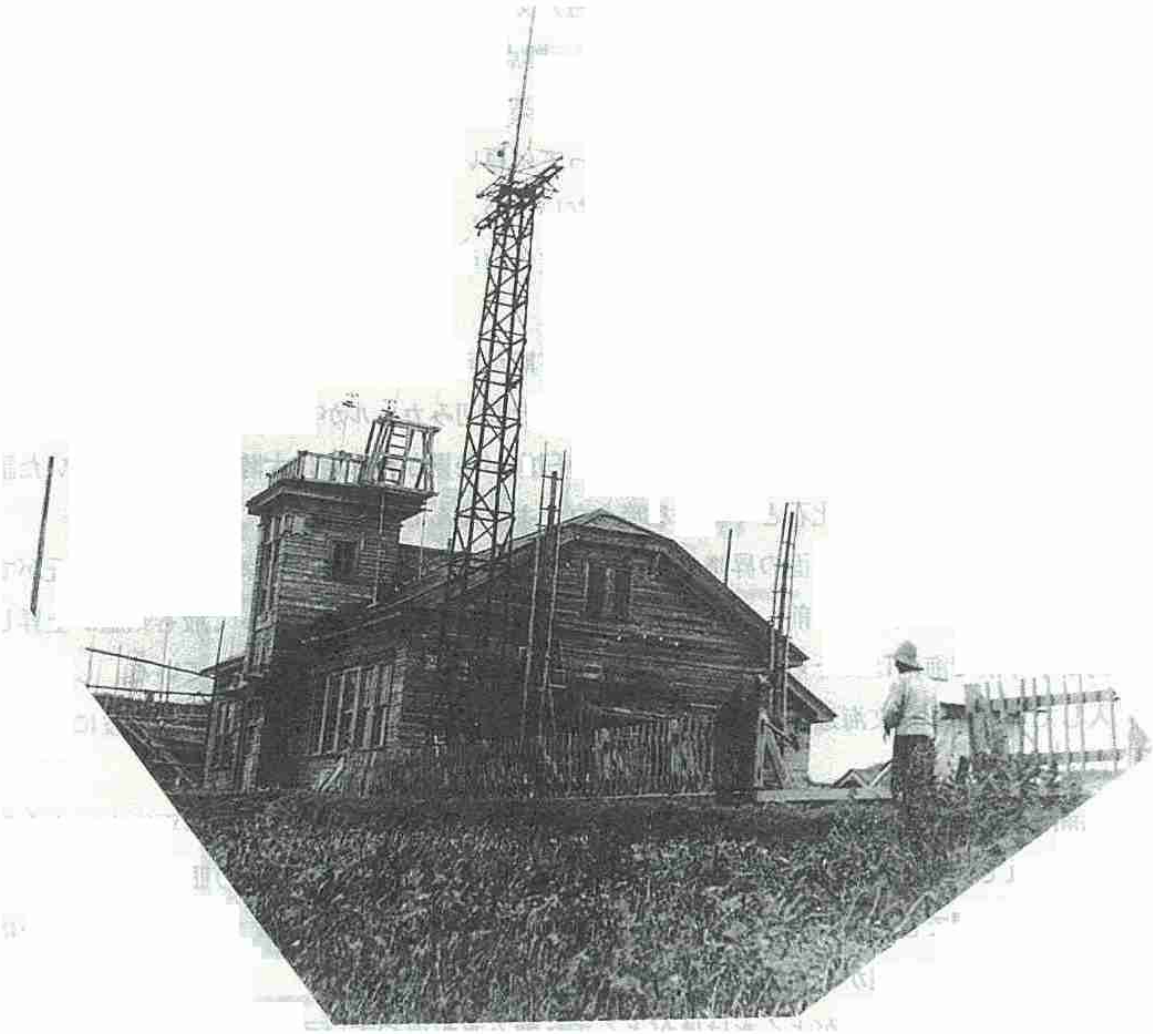

写真１
最初の庁舎（1926.12-1954.12）１９５４年5月9日撮影.
１９５４年（昭和２９年）5月9－１０日，発達した低気圧が本道を横断，全道暴風雨，被害大，１０日の日最大風速NW３５．２ｍは5月第1位の記録庁舎全景が入った写真はこの1枚で貴重なものである．この年の１２月には取り壊され，新庁舎に移る．

ことになった。写真中央の測風塔の右側（現業室）は浦河沖地震（１９８２年浦河沖地震）の後、改築されたので、この部分をのぞいて立替えられることになった。

浦河測候所の高台から望む景色は素晴らしい、海を黄金色に染めて沈む夕日を眺めるとき、先史時代の人達も同じ場所に立って同じ夕日を眺め、素朴で活動に満ちた生活を営んでいたであろうことを想い、親しみと憧憬が湧いてくる。

（浦河測候所長　稲童丸純）

写真２
現在の庁舎（1954.12-）１９９３年６月２１日，日高信用銀行屋上から撮影．